

いじめ自死 真相解明に至る体験

篠原 宏明

澄み渡る”青い空”

「君がため 尽くす心は 水の泡
消えにしあとは 澄み渡る空」

これは幕末の志士、土佐の岡田以蔵の辞世の句です。

2年前の6月7日、当時中学3年生の息子・真矢(まさや)はこの言葉を遺書の最後に書き残し、14歳の生涯を自らの手で閉じました。

私が“青い空”さんの活動に初めて触れたのは、昨年12月の設立15周年記念講演会・シンポジウムの時でした。講演を拝聴し皆様の活動の一端に触れ、改めて「今、生かされていることの意味」を考える機会を与えてくださったことに感謝をしたものです。“青い空”さんの活動が、息子が望んだ「澄み渡る空」に繋がるのではないかと感じ、こうして筆を取らせていただいた次第です。

息子へのいじめ

息子は遺書の中に「俺は困っている人を助ける、人の役に立ち優しくする。それだけを目指して生きてきました」と記しました。不器用で照れ屋で、言葉数の少

ない子でしたが、親でさえ知らないような崇高な目標を持っていた子で、将来は警察官になりたかったそうです。

息子がいじめを受け始めたのは中学2年の秋ごろです。大好きな友達が4人の加害生徒によっていじめられているのを見かね、それを助けようとして逆に自らがいじめのターゲットになったというのが始まりです。いじめは、殴る・蹴る・馬乗りになる・振り向きざまにビンタする・4人で羽交い絞めにして下着を脱がす・ある女子に対してその子が嫌がる言葉を書いて来いと命じるなどのものでした。

3年になってからはクラス替えもあり、息子への直接的ないじめは減りましたが、4人の加害生徒たちはターゲットを次々と替え、いじめを繰り返していたといいます。息子は彼らのその行為を戒め、そして復讐するために自らの命を絶ちました。遺書には加害生徒4人の実名を挙げ「奴らはたとえ死人となっても必ず復讐します」と強い言葉が残されていました。

事実解明

事件直後、学校は学校長、教師、PTA、市教委、精神科医のメンバーで「調査委

員会」を立ち上げました。同時に、調査が進むその間、今分かっている事実だけでも知りたいと学校に何度も足を運びましたが、調査委員会の報告が出るまでは何も答えることが出来ないと断られ続けたため、ついに学校との面談を打ち切ることにしました。その代わりとして毎週我が家を訪れ、調査の進捗状況を私たちに話して下さったのが、調査委員会のメンバーでもある市教委のお二人でした。

お二人は、2ヶ月以上の時間をかけ、何人もの生徒や教師から熱心に聞き取りをし、事実の解明に努め、また息子が残した数多くの詩やメモ、遺書や遺言から息子の心理状態にも触れ、息子が持っていた強い正義感、崇高な理想、そして優しさを丁寧に解明して下さいました。息子が何を憂い、何に絶望し、そしてどうして死を選ばなければならなかったか。その顛末が、最終的に46ページにも渡る調査報告書となって、私たちの手にただけたことにより、息子の死をきちんと受け止め、受け入れることが出来たのです。

また、私たちが救われたのはこのお二人の力だけではありません。事件当初か



亡くなる2ヶ月前に校庭で撮った制服姿の真矢くん

ら解明に向け動いてくださっていた警察の方からは、「加害生徒たちに対して反省の機会を与えましょう!」という強い口調で被害届を出すことを薦められ、その結果、加害生徒たちには半年間の保護観察処分が下されました。この裁定が下りたことを報告したとき、電話の向こうで男泣きをしてくれたのは、事件当初から担当して下さった刑事さんでした。

このように私たちは周囲の皆さんの熱い想いに支えられたお陰で、事実を隠蔽されることなく、その結果、民事裁判を起こす必要もありませんでした。

隠蔽が生む罪

私たち遺族は、我が子の死を誰かの責任とし、誰かを吊るし上げるために真相究明をしたいと言っているのではありま

せん。我が子に死なれた責任の重さというのは、遺族となった両親が誰より重く受け止め、日々自責の念に駆られています。しかし、命を救えなかったという点では遺族を含め、教師、クラスメイトなど、関わった全ての人たちに大なり小なり、それぞれ責任があると私は思っています。

隠蔽からは何も生まれません。そして、誰も救われません。亡くなった者からは「命の尊厳」を奪い、遺族からは「事実を知りたい」という当然の権利を奪い、周囲の子どもたちからは「大人に対する信頼」を奪います。そして何より、加害生徒からは「己と向き合い、反省する機会」を奪います。彼らには心からの反省を促し、被害に遭った人たちへ謝罪させてあげることが何より大切です。彼らには「罰」を与えるのではなく、愛をもって「反省する機会」を与えてあげることだけが、

彼らを救ってあげる唯一の方法ではないでしょうか。

残された者の責務

亡くなった子が何を思い、何に絶望し、そして何をどう変えたかったのかは、強い信念と志さえあれば、必ず明らかにすることができます。そして、それを解明するのは、間違いなく残された者の責務です。それぞれの者がそれぞれの立場で自分と向き合い、反省するためには、真実を明らかにしてそれを受け止め、糧にすることでしか、前に進むことはできません。

この世に絶望し亡くなった者が、また生まれて来たいと思えるような、そんな世界を作る責任が私たち大人にはあるのではないのでしょうか。

〈 篠原宏明さん 〉

「いじめ」や「学校事故」、「虐待」をはじめとするさまざまな問題の調査や研究を行う『一般社団法人ここから未来』理事。2010年6月7日、当時中学3年生だった次男、真矢（まさや）さんが「友達のことを護れなかった」という遺書を遺し自死。「困っている人を助ける。人の役に立ち優しくする。それだけを目指して生きてきました。」という我が子の思いを継ぎ、いじめをなくす活動に関わっている。